

サッカラ

高橋 寿光*

1. 遺跡のエジプト学的特質

サッカラは、世界遺産「メンフィスとそのネクロポリス：ギザからダハシュールのピラミッド地帯」の中心的な墓地遺跡であり、南北約 40km、東西約 6.2km の範囲に広がる (Figs.1-4.)。サッカラの北端は、アブ・シール・ワディを境とし、南端はケンジェルスのピラミッドの南側の線路がダハシュールとの境になる。古代エジプトで長期間首都として機能していたメンフィスの西側に位置し、メンフィスの墓地として、古代エジプト王朝時代を通じて、初期王朝時代の第 1 王朝 (紀元前 3100 年) からプトレマイオス朝時代 (紀元前 30 年) まで、使用された場所であった。3000 年以上の長期間にわたって、同じ地域に墓地が営まれたため、重層的な遺跡を形成しており、過去の建造物や墓を利用して新たに墓を作る例が多々見受けられる¹⁾。

広大な地域の中でも、アブ・シール湖から階段ピラミッド周辺の一帯が中心的な墓地として使用され、特に初期王朝時代から古王国時代、新王国時代、末期王朝時代には、王家の墓地、中心的な墓地として多数の墓が築かれている。

以下に、サッカラの中心的な時代となる初期王朝時代から古王国時代、新王国時代、末期王朝時代の 3 つの時代について概観し、遺跡のエジプト学的特質について述べてみたい。

(1) 初期王朝時代から古王国時代

初期王朝時代のサッカラは、サッカラの最北端にあるアブ・シール湖から砂漠の奥部に広がるアブ・シール・ワディを中心に発展していった。ワディの反対側のアブ・シールでも、初期王朝時代の墓地遺跡が広がっている。

サッカラでは、初期王朝時代にワディの南東に位置する台地上に日乾煉瓦製のマスタバ墓が多数築かれるようになり (Fig.5; Emery 1949; 1954; 1958; 1961)、また近年では、台地の崖にも初期王朝時代から古王国時代の岩窟マスタバが発見されている。

この墓域は、更に南に展開していき、第 2 王朝には現在の階段ピラミッドの南側にヘテプセケムイ王墓、ネテヘル王墓が造営されるようになり (Dreyer 2007; Regulski and Kahl 2010)²⁾、更に、西側には第 2 王朝の王に帰属すると考えられる 2 つの周壁が築かれている (Fig.2)³⁾。こうして第 2 王朝には、サッカラは王家の墓域として機能するようになった。

初期王朝時代第 2 王朝に王墓地として確立したサッカラは、続く古王国時代第 3 王朝に初代のジェセル王が、エジプト史上初となるピラミッド複合体を建造した (Fig.6; Lauer 1976)。台形のマスタバ墓を 6 段重ねた高さ約 60m の階段状のピラミッドと、ピラミッド本体の周辺には、空堀、周壁、葬祭殿、セド祭殿など、埋葬儀礼に関わる施設が建てられており、後のギザのピラミッドなどに続くピラミッド複合体の祖形が誕生している。また、これまで建築部材として主に使用された日乾煉瓦や植物から、石材を使用した建造物を建てるという転換があったのもこの階段ピラミッドからである。ジェセル王の次のセケムケト王も、階段ピラミッドの南西に

* 早稲田大学エジプト学研究所客員次席研究員



Fig.1 サッカラ衛星画像 ©Google Earth



Fig.2 サッカラ衛星画像 ©Google Earth



Fig.3 サッカラ衛星画像 ©Google Earth



Fig.4 サッカラ衛星画像 ©Google Earth



Fig.5 初期王朝時代のマスタバ墓群



Fig.6 ジェセル王の階段ピラミッド（修復中）



Fig.7 マスタバ・アル=ファラオン



Fig.8 ウセルカフ王のピラミッド



Fig.9 ジェドカーラー・イセジ王のピラミッド



Fig.10 ウナス王のピラミッド



Fig.11 テティ王のピラミッド



Fig.12 ペピ1世のピラミッド



Fig.13 メルエンラー王のピラミッド



Fig.14 ペピ2世のピラミッド

ピラミッドを造営したが、このピラミッドは未完成で終わっている (Fig.2; Goneim 1957)。

その後、王墓地は、南のダハシュール、メイドゥーム、北のギザ、アブ・ロアシュに移っていき、しばらくの間、サッカラには目立った建造活動は行われなくなる。次にサッカラに王墓が築かれるのは、第4王朝の最後の王、シェプセスカフ王の時代であり、南サッカラにマスタバ状の王墓、通称「マスタバ・アル=ファラオン」を建造した (Figs.3, 7; Jéquier 1928)。シェプセスカフ王の次の王である第5王朝初代のウセルカフ王もサッカラの階段ピラミッドの北東付近にピラミッド型の王墓を築いている (Figs.3, 8; Lauer 1956; El-Khouli 1985)。その他、第5王朝では、ジェドカーラー・イセジ王が南サッカラにピラミッド (Figs.3, 9; Strouhal and Gaballa 1993)、第5王朝最後のウナス王が階段ピラミッドの南西にピラミッドを造営している (Figs.3, 10; Hassan 1955; Labrousse et al. 1977)。なお、このウナス王のピラミッドは、ピラミッドの玄室に初めて宗教文書である「ピラミッド・テキスト」が刻まれたことでも知られている。続く第6王朝初代のテティ王が北サッカラにピラミッドを造営し (Figs.3, 11; Firth and Gunn 1926; Lauer and Leclant 1972)、続くペピ1世 (Figs.3, 12.; Labrousse 1991)、メルエンラー王 (Figs.3, 13; Maspero 1887; 1888; 1889)、ペピ2世 (Figs.3, 14; Jéquier 1928; 1933; 1940) は南サッカラにピラミッドを造営している。

以上のように、初期王朝時代から古王国時代のサッカラでは、エジプトの統一王朝が誕生し、首都が南からメンフィスに遷るに伴って、王や高官の墓地も、南のアビュドスからサッカラに移るようになる。サッカラは、初期国家誕生直後の様相を知る上で重要な歴史的価値を持ち、また初めてピラミッドとその周辺施設が建設されるなど、古代エジプトを特徴づける多数の文化的要素が大規模に出現した遺跡としてもその重要性を述べる事ができるであろう。更には、第4王朝の終りから第6王朝にかけて、繁栄を極めた国家が次第に衰退していく様相を具体的に示す遺跡としても重要であると考えられる。

(2) 新王国時代

新王国時代になると、メンフィスが行政の中心となったこともあり、その墓地であるサッカラには、特に第18王朝中期から高官の墓が多く造営されるようになった。

ウナス王ピラミッドの参道の南では、アクエンアテン王からトウトアンクアメン王に仕えたアテン大司祭メリネイト (メリラー) (Raven 2002)、王の執事プタハエムウイア (Raven et al. 2007; 2009)、トウトアンクアメン王の治世の財務長官マヤ (Raven 2001; Martin et al. 2012)、軍司令官ホルエムヘブ (Martin 1989; Schneider 1996; Raven et al. 2011)、王のハーレムの長パイイ (Raven et al. 2005)、ラメセス2世の財務長官ティアとその妻ティア (Martin et al. 1997)、宰相ネフェルレンペト (Tawfik 1991) などの墓が集中している (Figs.3,



Fig.15 ホルエムヘブ墓周辺



Fig.16 ネフェルレンペト墓周辺



Fig.17 ブバステイオンの岩窟墓群



Fig.18 セラベウム

15, 16)。ブバステイオンと呼ばれる沖積地に面した砂漠の段丘からは、アメンヘテプ3世時代の宰相アペリアの墓、トウトアンクアメン王の乳母マイアの墓などが発見されている (Figs.3, 17; Zivie 2007)。その他、テティ王ピラミッド周辺 (ex. Firth and Gunn 1926) やアブ・シール・ワディ南東の台地の崖下などにも数多くの高官の墓が建設されている (Fig.3)。

サッカラには、新王国時代においては、特に、エジプトが経済的、文化的にも絶頂の時期を迎えた第18王朝後期のアメンヘテプ3世時代から、エジプト史の一大画期となるアマルナ時代を挟んで、著名なトウトアンクアメン王の時代、そしてホルエムヘブ王、建築王ラメセス2世の時代など、エジプト史の最盛期にあたる重要な時期の宰相や大司祭、財務長官、軍司令官などの墓が存在している。最盛期のエジプト文化を具体的に示す遺跡としてその重要性を述べることができる。また古代エジプトの画期となるアマルナ時代、そして最も著名かつ謎の多いトウトアンクアメン王に関連する人物の墓が数多く存在し、当時の歴史を解き明かすことのできる資料が存在する点も重要性として加えることができるであろう。

(3) 末期王朝時代

末期王朝時代では、サッカラに聖なる動物の地下墓地が活発に造営され、数多くの聖獣が大量に埋葬されるようになった。ヒヒ、タカ、トキとともに「アピスの母」とされる雌牛、イヌ、ネコなどの動物が埋葬された。最も有名な遺跡は、アメンヘテプ3世の治世から造営が始まった聖牛アピスの埋葬地セラベウムであり (Figs.3, 18; Maspero and Mariette 1882)、その他、動物墓地として知られるサッカラ北部のヒヒ、タカ、トキの墓地 (Fig.3; Martin 1981)、バステト神の化身であるネコを大量に埋葬したブバステイオン (Fig.3.; Zivie 2007)、イヌを埋

葬したアヌビエイオンなどが存在している (Fig.3; Jeffreys and Smith 1988; Giddy 1992)。

これらの墓地は、前述した古王国時代や新王国時代などのように、大きな歴史的価値を示すものではないものの、古代エジプト人のユニークな信仰の一端を示す資料として重要である。

2. 遺跡の現状

現在のところ、観光客に公開されている遺跡は、ジェセル王の階段ピラミッド周辺に集中しており、ここでは遺構の復元・保護、道路や博物館が整備されるなど、整備が行われている。一方で、それ以外の地域は、基本的に観光客に公開しておらず、遺跡整備は調査を行ったそれぞれの調査隊に任されるか、もしくは発掘後にそのまま放置されるなど、特別な整備が行われていない場合が多い。ここでは大きく、公開されている遺跡と公開されていない遺跡に分けて、遺跡整備の現状とその問題点について述べてみたい。

(1) 公開されている遺跡

サッカラでは、ウナス王の河岸神殿付近にチケット・オフィスがあり、一般の観光客はここでチケットを購入し、バスや車でそれぞれの遺跡まで行くのが一般的である。

チケット・オフィスの北側には、イムヘテプ博物館が作られている (Fig.19)。これは遺跡見学の前に訪れ、サッカラの歴史などを知り、より遺跡に対する理解を深める目的で建てられたものである。博物館ではサッカラ各地から、各国の調査隊の発掘調査によって出土した遺物が展示され、またサッカラ全体の説明や階段ピラミッドで長年調査を行ったフランス人建築家 J-Ph. ロエール氏の業績を説明するコーナーなどもある。また、遺跡の内容を理解するための視聴覚講堂、休憩などを目的とするカフェテリアも作られているが、現在では閉まっており、博物館とトイレが使用できるのみとなっている。

2012年に現地を確認した限りでは、公開されている遺跡は以下の通りであるが、これらの公開遺跡のうち、特にマスタバ墓などは、特に事前のアナウンスもなく修復などを目的とし、公開が中止される場合がある。また次にいつ公開が再開されるのかもアナウンスされない場合がほとんどである⁴⁾。

- ・ジェセル王階段ピラミッド (内部は非公開)
- ・テティ王のピラミッド
- ・カゲムニのマスタバ墓
- ・ティのマスタバ墓
- ・セラベウム
- ・ホルエムヘブ墓、マヤ墓、ティア墓、メリネイト墓、プタハエムウィア墓、パイとライア墓

各遺跡には簡易の駐車場、簡易トイレ (移動式) が設置されている。また飲み物やお土産などを販売する露天商などもある。

遺跡内部では、最低限の木の床、手すりなどが設置されているものの、特にガラスなどによる覆いはなく、観光客は自由に遺構やレリーフに触れることができるようになっている。遺跡のガードが付き添い、注意を与える場合もあるが、すべてをカバーできるはずもなく、従って、所々、石が磨かれている部分、彩色が剥がれているも見られる。

照明については、例えば、マスタバ墓などでは天井から太陽光を取り入れたものとなっているが、こうした

太陽光は長い年月の中で遺跡の劣化につながる恐れがある。またランプなどを使用している場合には、所々つかないものがあり、メンテナンスの不備がみられる。また空調管理なども行われておらず、場所によってはかなりの湿度上昇を感じることもある。

遺跡の内容を説明する看板などは、最低限の情報しか掲示しておらず、個人旅行者にとっては不親切な作りとなっている (Fig.20)。これは現在のエジプト観光のスタイルが団体客にガイドが付き添い説明を行うという、いわゆるマス・ツーリズムのスタイルが主流であるということが影響していると考えられる (cf. 高梨2011)。

このように、現在、サッカラで公開されている遺跡では、必要最低限の整備しか行われておらず、またその整備のコンセプトも前時代的なものとなっている。

こうした中で、近年、オランダ隊によるホルエムヘブ墓周辺の保存修復と遺跡管理プロジェクトが行われ、2011年にホルエムヘブ墓とその周辺の5つの墓が一般公開された。

レリーフの説明などを記載した案内板が場所ごとに設置されており、遺跡の概要を知ることが可能となっている (Fig.21)。レリーフ部分には簡易的な屋根がかけられており、遺跡の外観を損ねず遺構を保護するという目的を達成している (Fig.22)。また、現状では階段ピラミッドなどの中心的観光地の南に位置することから、訪れる観光客が少なく、ガードの管理が行き届いており、レリーフなどを触ることもないように考えられる。

この遺跡管理については、現代の遺跡管理の基準をある程度満たしており、今後、この遺跡管理をスタンダードとして、他の遺跡でも改善を図ることが課題と考えられる。



Fig.22 イムヘテプ博物館



Fig.19 看板



Fig.20 ティア墓の案内板

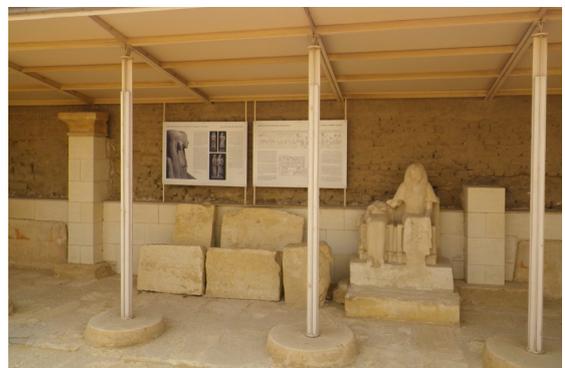


Fig.21 遺構の保護

(2) 公開されていない遺跡

上記に述べた公開遺跡以外は基本的に公開されていない。遺跡を訪れることは可能であるが、観光客の訪問を想定した遺跡整備は行われておらず、場合によっては遺跡の破壊に繋がる場合もある。ここではいくつかの例を挙げて、その現状について述べてみたい。

① アブ・シール・ワディ南東の台地上の日乾煉瓦製のマスタバ墓

W. エマリーによって発掘調査が行われたマスタバ墓は、歴史的にも、またエジプト学史的にも重要な遺構であるにもかかわらず、遺跡保護はほとんど行われておらず、いわば野ざらしの状態となっている (Fig.23)。現在では、風により自然に砂に覆われた状態となっており、劣化はある程度食い止められているように思われるが、そこに至るまでにおそらく多くの遺構が失われているものと考えられる。

② ペピ1世のピラミッド複合体

南サッカラに位置するペピ1世のピラミッド複合体では、フランス隊による調査が行われており、発掘調査後の遺跡保護、遺跡整備が大規模に行われている (Fig.24)。現在のところ、観光客には公開されていないが、遺構のプランをわかりやすくするような遺構の保護が行われており、遺構の保護と展示という2つの目的を達成している。またピラミッドの玄室内部屋根の不安定箇所などの補強工事、石棺の修復などの保存修復作業も行っており、一般公開できるような作業を発掘と並行して実施している。発掘と修復をある程度両立したモデルとして、今後この地域のスタンダードになっていくことが望まれる。



Fig.23 初期王朝時代のマスタバ墓群



Fig.24 ペピ1世のピラミッド複合体の遺跡整備

③ 現代の住居、墓地、廃棄物の問題

特定の遺跡ではないが、サッカラ全域で現代の住居、墓地が砂漠地帯に迫っており、まだ発掘されていない埋蔵遺跡を直接的に破壊するという問題が起こっている。また廃棄物の不法投棄が見られる箇所も存在している。特に、アブ・シール・ワディ南東の台地下には、居住区や現代の墓地が迫っており、ごみの投棄や生活排水の問題とともに深刻な問題となっている (Fig.25)。

このように公開されていない遺跡では、大きな問題点として、一部の遺跡を除き、発掘後に遺跡保護がされていないことによる自然劣化、そして現代の住居、墓地の進出および廃棄物の不法投棄などによる直接的な破

壊の2つの問題が挙げられる。

こうした現状を踏まえ、2000年頃から遺跡管理に関する必要性が提唱されるようになってきた。主な取り組みとしては、2000年からのイタリア隊による取り組みが挙げられる。“Enhancement of the Organization and Capabilities to Preserve the Cultural Heritage of Egypt”と題されたプロジェクトでは、1. エジプト学、保存、環境、地図などのデータの統合、2. 遺跡の価値、脆弱性、危険因子の分析、3. リスクマップの作成という3つの段階を経て、最終的に今後の遺跡管理計画に資するリ



Fig.25 現代墓地

スクマップを提示することを目的としている。北サッカラを中心に、地理情報システムの導入と限定的ではあるが、インベントリ、文献目録の作成、コンディションサーベイ、環境計測などを実施し、これらのデータの統合の後に、サッカラのリスクマップを提示し、成果物を刊行している (Ago et al. 2003)。

こうした取り組みにより、サッカラ遺跡の現状が把握され、基礎データが揃うようになってきたものの、依然として具体的な取り組みには至っていない。特に2011年1月の革命後には、地域の治安が悪化し、盗掘などが横行するようになったため、この対策が緊急課題となり、長期的遺跡管理に関する対策はほとんどとられていなかった。状況が次第に改善されてきた現在では、遺跡管理に取り組み、これらを地域の観光資源として長期的に活用することにより、観光によるメリットを地域に生み出すようなシステム、そのために地域全体で遺跡を保護するような意識を作り出すことが将来的な課題となるであろう。

註

- 1) 例えば、現在、ポーランド隊が調査を行うジェセル王階段ピラミッドの西側の区域では、階段ピラミッドを囲う空堀を利用し、古王国時代第6王朝の宰相メレフネベフなどの墓が造られている (Myśliwiec 2004)。また、オランダ隊が調査を行うウナス王ピラミッド参道の南側に位置するホルエムヘブ墓などでも、古王国時代のシャフトを再利用した例が報告されている (Martin 1989)。
- 2) その他、オランダ隊が調査を行うウナス王ピラミッド参道の南側に位置するマヤ墓の下からも、第2王朝の高官の墓が確認されている (Regulski 2009, 2011, 2012)。
- 3) 西側の周壁は、「大周壁」と呼ばれており、スコットランド隊による調査が行われている (Mathieson and Tavares 1993; Mathieson et al. 1997; 1999; Mathieson 2000)。
- 4) 公開中の墓として、SCAのホームページ (http://www.sca-egypt.org/eng/SITE_Saqqara_MP.htm) では、ジェセル王階段ピラミッド、テティ王のピラミッド、メレルカの mastaba 墓、カゲムニの mastaba 墓、プタハヘテブの mastaba 墓、ティの mastaba 墓、イネフェルトの mastaba 墓、ウナス・アングの mastaba 墓が挙げられている。また、特別許可が必要な墓として、イルカヘテブの墓、ニアングクヌムとクヌムヘテブの墓、ホルエムヘブの墓が挙げられている。現地との状況とは若干の相違がある。